

『南嶽倡酬集』成書攷

序

乾道三年（一一六七）、朱子はその畏友張栻を長沙に訪れた後、朱子・張栻及び朱子の門人林用中りんちゆうちゆうとの三人で、冬十一月六日から十六日にかけて南嶽衡山の遊に赴き、その三人の間で次から次へと即興的に詩の酬答を行い、『南嶽倡酬集』と題してその一連の過程で作られた作品群を纏めた。この集のために張栻は「南嶽唱酬の序」を書いて一連の周遊の過程を詳述し、朱子は「南嶽遊山後記」を書いて自戒を交えつつ當時の唱酬の意義を總評している。現在この『南嶽倡酬集』は單行本として四庫全書に收められていて、多くの人々の閱覽に供されているが、その所收詩と、朱子の別集『晦庵先生朱文公文集』（以下『朱文公文集』）や、朱子の手によって編

後 藤 淳 一

まれた張栻の別集『南軒集』所收の作品とを突き合わせてみると、その内容に多くの問題點が含まれていることが見出せる。本稿では特にその成書過程に關する諸問題を中心に考察を進めて行くこととする。

一 『南嶽倡酬集』に關する先行研究

『南嶽倡酬集』に關してはこれまでの所、朱子の著作を收集・整理する過程で付隨的に論じられることはあっても、『南嶽倡酬集』自體に焦點を絞った專論は殆ど無かったようである。そのような状況の下、王利民「流水高山萬古心——『南嶽倡酬集』論析」（『文學遺產』二〇〇三年第一期、p.56—p.64）は殆ど唯一と言っても良い專論であろう。該論は思想的・藝術的見地からの『南嶽倡酬集』論に多くの紙幅を割いている

中國詩文論叢 第二十四集

が、その第一節では『南嶽倡酬集』の版本考異に關する考察を行っており、少なからず啓示を得た。その記述に據れば、現在目睹し得る『南嶽倡酬集』の版本には、

① 北京圖書館藏明弘治刻本（以下「明刻本」）

② 四庫全書集部總集類本（以下「四庫全書本」）

③ 南京圖書館藏清嘉慶手抄本（以下「清抄本」）

の三種があるのみだが、この三種は源を同じくし、明の天順四年（一四六〇）、林用中の十一代の子孫である林希仲が刊行した『南嶽倡酬集』を祖本としていたことである。更に該論ではこの三種の版本に共通する問題點として、

(1) 所收の作品數が張栻「南嶽唱酬の序」に謂う所の百

四十九首と合致しない（詩題數は全五十七題、三人の

總作品數は全百六十一首）。

(2) 作品の配列が朱子一行の南嶽周遊の時系列と矛盾する部分がある。

(3) 明らかな文字の誤りが多い。

(4) 一部の作品の作者を誤認していたり（張栻の作を朱子の作とするなど）、南嶽周遊の過程に於ける作品ではないものも收められている。

の四點を擧げている。この四點については私も予てより氣付

いていた所であるが、その問題の根源はやはりその成書過程に由來すると見ており、王氏の論攷を元に實際に南京圖書館・北京圖書館に赴いて、マイクロフィルムではあるが各版本の調査を行なつて來た。その結果を踏まえて次節以降に考察を深めて行く積もりであるが、その前にまずは、最も通行性の高い四庫全書本によって、現行の『南嶽倡酬集』の面貌を紹介し、上記の問題點を今一度確認してみたい。

二 四庫全書本『南嶽倡酬集』

四庫全書本『南嶽倡酬集』は四庫全書の集部八（總集類二）に收められているが、その體裁はと言つと、

○ 南嶽倡酬集原序（朱子撰「南嶽遊山後記」）

○ 南嶽倡酬集原序（張栻撰「南嶽唱酬序」）

○ 南嶽倡酬集（本文）

○ 南嶽倡酬集附錄（朱子「答林擇之書」・「遺事十條」・「林用中字序」・「林允中字序」）

○ 東歸亂藁序（朱子撰）

という順序で記載されている。

最初の「原序」とは朱子を書いた「南嶽遊山後記」（『朱文公文集』卷七十七所收）であり、

南嶽唱酬 庚辰「十一月十六日」に訖り、敬夫「張拭」
 既に其の然る所以の者を序して之を藏せり。癸未「十
 一月十九日」勝業「勝業寺」を發ち、伯崇「范念德」
 も亦た其の羣從昆弟に別れて来る。始めて水簾「水簾
 洞」の勝を聞き、將に往きて一たび觀んとするも、雨
 を以て果さず。而うして趙醇叟「趙師孟」、胡廣仲
 「胡憲」、伯逢「胡大原」、季立「胡大本」、甘可大「不
 詳」來りて雲峰寺に餞し、酒五たび行きて、疑ふ所
 を劇論して別る。丙戌「十一月二十二日」儲州「湖南
 省株洲市」に至り、熹・伯崇・擇之「林用中」と道を
 取りて東のかた歸り、而うして敬夫此より西のかた
 長沙に還れり。癸未より丙戌に至るまで凡て四日、嶽
 宮「衡山の麓にある南嶽宮」より儲州に至るまで凡て
 百有八十里、其の間山川林野、風煙景物、向來見る
 所に視べて詩に非ざる者無し。……丁亥「乾道三年、
 一一六七」、新安の朱熹記す。

と記されるもので、南嶽衡山を下りた後の四日間の行程及び
 その間の吟詠の意義を總評したものであり、冒頭に「敬夫
 既に其の然る所以の者を序して之を藏せり」とあることから
 も明らかなように、本來ならば次の張拭の序を先に掲げるべ

『南嶽唱酬集』成書攷（後藤）

きである。

その張拭の「南嶽唱酬の序」（『南軒集』卷十五所收）はまず、
 某湖湘に來往して二紀「二十四年」を踰え、衡嶽の
 勝を夢寐し、亦た嘗て跡を其の間に寄するも、獨り未
 だ絶頂に登りて快を得ずを得ざるなり。乾道丁亥「三
 年、一一六七」秋、新安の朱熹元晦來りて予を湘水
 の上に訪ね、留りて再び月を閲し、將に南山に道して
 「衡山を通て」以て歸らんとす。迺ち始めて偕に此
 の遊を爲す。而うして三山の林用中擇之も亦た焉に與
 る。

と、朱子・張拭・林用中の三人で衡山を周遊することになっ
 た経緯から書き起こし、次に、

粵えて十有一月庚午「十一月六日」、潭城「長沙」自
 り湘水を渡り、

甲戌「十一月十日」、石灘を過ぎ、始めて嶽頂を望む。

……

乙亥「十一月十一日」嶽「南嶽衡山の麓」に抵るの後、
 丙子「十一月十二日」小憩するに、甚だ雨ふり、暮る
 るも未だ已まず。……而うして夜半雨止み、起きて
 視れば、明星爛然たり。

中國詩文論叢 第二十四集

曉「十一月十三日」に比^ひび、日^ひ陽^{やう}谷^く「東の空」に昇^あれり。予^よが三人^{さん}騎^きを聯^{つら}ねて興^{こう}樂^{らく}江^{かう}を渡^わるに、……竹^{ちく}輿^いに易^いへ、馬^ば跡^{せき}橋^き由^より山^{さん}に登^{のぼ}る。……日^ひ暮^ぼ方^{ほう}廣^{くわう}「方^{ほう}廣^{くわう}寺^じ」に抵^{いた}れば、氣^き象^{しやう}深^{しん}竅^{きやう}、八^は峰^{ほう}環^{わん}立^{りつ}し、所^{しよ}謂^ゐる蓮^{れん}花^か峰^{ほう}なり。……

戊^う寅^{ぎん}「十一月十四日」明^{めい}發^{はつ}し「夜^や明^{めい}けに出^い發^{はつ}し」、小^{せう}徑^{かう}を穿^うちて高^{かう}臺^{たい}寺^じに入^いる。……

己^こ卯^{みう}「十一月十五日」、武^こ夷^{よく}の胡^こ寔^{しよく}廣^{くわう}仲^{ちゆう}、范^{はん}念^{ねん}德^{とく}伯^{はく}崇^{しゆう}來^きりて會^{かい}し、同^{どう}に仙^{せん}人^{じん}橋^{きやう}に遊^{あそ}ぶ。……

庚^{かう}辰^{しん}「十一月十六日」未^みだ晚^くれざるに、雪^{せつ}窗^{かう}を撃^うちて聲^{こゑ}有^あり、驚^{おどろ}覺^{かく}す。將^{まさ}に山^{さん}を下^{くだ}らんとす。……行^いくこ^こと三十^{さんじ}里^り許^{ばかり}にして、嶽^{たつ}市^し「衡^{かう}山^{さん}の麓^{ふもと}にある市^し街^{かい}地^ち」に抵^{いた}り、勝^{しやう}業^{ぎやく}寺^じの勁^{きん}節^{せつ}堂^{だう}に宿^{しゆく}る。

と、時^{とき}系^{けい}列^{りつ}に沿^{したが}つて周^{しゆう}遊^{ぎゆう}の經^{かう}路^ろや各^{かく}景^{かう}勝^{しやう}の様^{よう}相^{さう}、一^{いつ}行^{かう}の間に起^{おこ}つた出來^き事^じなどを詳^{しやう}述^{じゆつ}し、最^{さい}後^ごに、

蓋^{さへ}し甲^{かう}戌^{しつ}自^{より}り庚^{かう}辰^{しん}に至^{いた}るまで凡^{すべ}て七日^{にち}、經^{かう}行^{かう}上^{じやう}下^{かう}數^{すう}百^{ひやく}里^り、景^{かう}物^{ぶつ}の美^み彈^{だん}くは敘^のぶ可^べからず。閒^{かん}ま亦^{また}た吟^{ぎん}詠^{ぎやう}に發^{はつ}し、更^{さら}迭^{だつ}唱^{ちやう}酬^{じゆう}、囊^{なう}を倒^{たふ}にすれば百^{ひやく}四十^{しじゅう}有^あ九^く篇^{ぺん}を得^えたり。一^{いつ}時^{とき}の作^{さく}にして工^{こう}を盡^{つく}つす能^{のう}はずと雖^{すべ}ども、然^{しか}れども亦^{また}た以^{もつ}て耳^{みみ}目^めの歷^ふる所^{ところ}と夫^かの興^{かう}寄^ぎの託^{たく}する所^{ところ}と

を見る可^べし。異^い日^{にち}或^{ある}ひは攷^{かう}すること有^あらん。乃^{すなは}ち哀^あめて之^{これ}を録^{ろく}す。……嗟^{ああ}乎^や、是^この編^{へん}を覽^みる者^{もの}、其^{その}れ亦^{また}た吾^{われ}が三人^{さん}の者^{もの}を以^{もつ}て自^{みづか}ら傲^いむるか。南^{なん}嶽^{たつ}唱^{ちやう}酬^{じゆう}の序^{しよ}を作^{つく}る。廣^{くわう}漢^{かん}郡^{ぐん}の張^{ちやう}某^{めい}敬^{かう}夫^ふ云^いふ。

と、七日^{にち}間の行^{かう}程^{かう}で三人^{さん}が作^{つく}つた詩^し百^{ひやく}四^し十^{じゅう}九^く首^{しゆ}を纏^{まと}めて詩^し集^{しふ}に仕^し立^りてたことを述^{しゆ}べて、序^{しよ}文^{ぶん}を締^しめ括^{くわく}るのある。

上^{じやう}記^きの二^に序^{しよ}を承^{うけ}けて次^{つぎ}に四^し庫^こ全^{ぜん}書^{しよ}本^{ほん}は唱^{ちやう}酬^{じゆう}詩^しの本^{ほん}文^{ぶん}を掲^かげるのであるが、その體^{たい}裁^{さい}は、例^{れい}えばその冒^{ぼう}頭^{とう}に、

七日^{にち}發^{はつ}嶽^{たつ}麓^{ふもと}道^{だう}中^{ちゆう}尋^{しん}梅^{ばい}不^ふ獲^{かく}至^し十^{じゅう}日^{にち}遇^ぐ雪^{せつ}賦^ふ此^こ

三^{さん}日^{にち}山^{さん}行^{かう}風^{ふう}繞^{にやう}林^{りん}天^{てん}寒^{かん}歲^{さい}暮^ぼ客^{かく}愁^{しゆう}深^{しん}心^{しん}期^き已^い悞^ご梅^{ばい}花^{かう}笑^{しやう}急^{きふ}雪^{せつ}紛^{ふん}更^{さら}滿^{まん}襟^{きん}仲^{ちゆう}晦^{かい}

眼^{がん}看^{かん}飛^ひ雪^{せつ}洒^さ千^{せん}林^{りん}更^{さら}著^{しやく}寒^{かん}溪^き水^{すい}淺^{せん}深^{しん}應^{おう}有^あ梅^{ばい}花^{かう}連^{れん}夜^や發^{はつ}却^{きやく}煩^{はん}詩^し
句^く寫^{しやう}愁^{しゆう}襟^{きん}敬^{かう}夫^ふ

昨^{あけ}日^{にち}來^き時^{とき}萬^{まん}里^り林^{りん}長^{ちやう}江^{かう}雪^{せつ}厚^{こう}浸^{しん}猶^{いゆう}深^{しん}蒼^{そう}茫^{まう}不^ふ見^{けん}梅^{ばい}花^{かう}意^い重^{じゆう}對^{たい}晴^{せい}
天^{てん}豁^{かく}晚^{わん}襟^{きん}擇^{たく}之^{これ}

とあるように、まづ一つの詩^し題^{だい}を掲^かげ、その後^{のち}に朱^{しゆ}子^し（字^{あざな}は「仲^{ちゆう}晦^{かい}」）・張^{ちやう}弼^ふ（字^{あざな}は「敬^{かう}夫^ふ」）・林^{りん}用^{よう}中^{ちゆう}（字^{あざな}は「擇^{たく}之^{これ}」）の順^{しゆん}で三人^{さん}の作^{さく}品^{ひん}を掲^か出^{しゅつ}するのである。

こ^こで篇^{ぺん}末^{まつ}に付^つした【四^し庫^こ全^{ぜん}書^{しよ}本^{ほん}『南^{なん}嶽^{たつ}倡^{ちやう}酬^{じゆう}集^{しふ}』全^{ぜん}詩^し對^{たい}照^{しやう}表^{へい}】を參^{さん}照^{しやう}して頂^{ちやう}きたいが、詩^し題^{だい}は全^{ぜん}五^ご十^{じゅう}七^{しち}題^{だい}。三人^{さん}が一^{いつ}首^{しゆ}

づつ作れば詩の總數は百七十一首になる筈だが、四庫全書本に收められる詩の總數は全百六十一首。それは内に三人の合作とされる聯句三首（詩題番號三六・三八・五〇。但しどの句を誰が作ったかは明示されていない）と、朱子のみが作った古詩二首（詩題番號四四・四七）とが含まれるからであるが、この數量は、前節で紹介した王氏の論攷でも問題點の(1)として掲げられていた如く、張栻の序に謂う所の「百四十有九篇」と合致しない。

また、同じく王氏の掲げる問題點(2)については、例えば、張栻の序に「曉に比あつきび、日暘谷やつくに昇れり。予が三人騎を聯りうねて興樂江こうがくを渡るに、……竹輿やぐに易へ、馬跡橋ばし由り山に登る」とあるにも拘わらず、「渡興樂江望祝融次擇之韻」詩（詩題番號四〇）は「馬跡橋」詩（詩題番號〇六）の遙か後方に置かれてゐるなどの矛盾がある。

更に同じく問題點(4)については、例えば、詩題番號三五・四一・四二・四三・四五・四九・五四で朱子の作とされるものは現行の『朱文公文集』には見えず、全て『南軒集』に收められる張栻の作である點などがある。付言すれば、上述の聯句とされる三首もいずれも張栻獨自の作であつて、三人の合作としての聯句では決してない。

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

全ての詩を掲出した後、四庫全書本には附録として、『朱文公文集』に散見する、朱子が林用中に宛てた書簡計三十三篇と、朱子が他の門人に宛てた書簡中や『朱子語類』等に散見する林用中の事績計十條、及び朱子が林用中とその弟林允中りんいんの爲に字を付けてやつた經緯を記した「林用中字の序」・「林允中字の序」（俱に『朱文公文集』卷七十五所收）が付せられ、最後に朱子が書いた「東歸亂藁の序」（『朱文公文集』卷七十五所收）を付す。

始め予擇之と敬夫に陪して南山の遊を爲し、幽を窮め勝を選び、相ひ與に詠じて之を賦す。四五日の間、凡そ百四十餘首を得たり。……其の事倡酬の前後の序篇に見え、亦た已に詳かなり。敬夫と別れて自り、遂に伯崇・擇之を偕ともひて東のかた來る。……蓋し儲州より宜春〔江西省宜春市〕を歴て、清江に汎うかび、豫章〔江西省南昌市〕に泊し、饒・信〔饒州と信州〕の境を涉り、繚繞すること數千百里、首尾二十八日、然る後に崇安に至る。始めて盡く其の藁を祛はらき、亂稿を掇あ拾し、纔かに二百餘篇を得たり。……故を以て復た毀棄せず、姑く序して之を存し、以て吾が黨の直諒多聞の益は遊談燕樂を以て廢せざる見す。……是れ則ち此

中國詩文論叢 第二十四集

の稿の存するは、亦た未だ以て益無しと爲して之を略す可からざるなり。……乾道丁亥〔乾道三年、一一六七〕冬十月二十有一日、新安の朱熹序す。

この序は上掲「南嶽遊山後記」の後を承けて、十一月二十二日に櫓州で張栻と別れて以降、朱子が故郷の崇安に歸るまでの道中に作った詩二百篇餘りを纏めて「東歸亂稿」と名付けた經緯を綴ったものであり、『南嶽倡酬集』自體に對する序ではないが、南嶽周遊に關連する記述があるので參考として付せられたものと考えられる。

三 四庫全書本『南嶽倡酬集』に對する四庫提要の見解

ここで、四庫全書に『南嶽倡酬集』を收載する過程で編修・校訂に當つた清朝の學者の見解を見て置こう。『四庫全書總目提要』卷一八七集部四十總集類二には次のように記述する。

『南嶽倡酬集』一卷、附錄一卷編修汪如藻家藏本

宋の朱子 張栻・林用中とともに南嶽に遊びて倡和するの詩なり。用中、字は擇之、東屏と號す。古田の人。嘗て朱子に従ひて遊ぶ。是の集 乾道二年十一月に作る。前に栻の序有り、「湖湘に來往すること二紀、

衡岳の勝を夢寐す。丁亥の秋、新安の朱元晦來りて予を湘水の上に訪ね、偕に此の遊を爲す」と稱す。而して朱子の詩題中亦た栻を稱して「張湖南」と爲す。蓋し必ず栻當時 衡湘の間に官たりて、故に此の稱有るならん。而れども『宋史』本傳止だ 栻の孝宗の時 荆湖北路轉運副使に任ぜられ、後 江陵府に知たりて、本路を安撫するを載するのみにして、其の曾て湖南に官たるを言はず。疑ふらくは史に脱漏有るか。其の遊 甲戌自り庚辰に至るまで凡て七日。朱子の「東歸亂稿の序」に「詩百四十餘首を得たり」と稱し、栻の序も亦た「百四十有九篇」と云ふ。今此の本錄する所五十七題に止まる。『朱子大全集』『康熙刊本『朱文公文集』を以て參校するに、載する所又た五十題に止まる。亦た『大全集』に有る所にして此の本載するを失する者有り。又た每題 皆な三人 同に賦するに、五十七題を以て之を計れば、亦た當に「一百四十九篇」と云ふべからず。知らず 何を以て參錯して合せざるか。又た卷中の聯句は、往往にして姓氏の標題を失去す。其の他の詩も亦た多く朱子の集中の題に依る。題して「敬夫の韻に次す」と作すも、其の詩實は栻の

作爲る者有るに至る。蓋し傳寫する者 譌誤脱佚し、當日の原本に非ざらん。後に朱子の「林用中^{うしゅう}に與ふるの書」三十二篇・用中の「遺事」十條・及び朱子作る所の「字の序」二首有り、皆な此の集の應に有るべき所に非ず。或ひは林氏の後人の附益する所なるか。然れども「南岳」を以て題を標するも別地の尺牘に泛及し、「倡酬」を以て名と爲すも平居の講論を濫載し、三人を以て集を合するも獨り用中一人の言行のみを載するは、皆な體例に非ず。姑く原本の有る所を以て之を存すと云ふのみ。

これに據れば、四庫全書に收められた『南嶽倡酬集』は當時汪如藻^{わうじょそう}の家に所藏されていたものであり、前節で示した如く、收載詩の數と朱・張兩序に謂う所の元來の詩篇の數との齟齬を既に當時指摘していたことが判る。また、朱子の別集と突き合わせてみて、『朱文公文集』に載せられていない詩題が七題、逆に『朱文公文集』に見えるのに『南嶽倡酬集』には見えない詩題もあること、三人がそれぞれ同じ題で作った筈なのに、「馬上口占次敬夫韻」（詩題番號〇六）や「霜月次擇之韻」（詩題番號二一）など『朱文公文集』の朱子の立場からの詩題をそのまま踏襲しているのは理に合わない點など

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

も指摘する。

但し、『南嶽倡酬集』の成立を「乾道二年」とするケアレミスはさておき、朱子が詩題中（詩題番號一八・四四）で張栻を「張湖南」と稱しているのに、『宋史』には張栻が荊南路安撫使（知潭州）になったことを記載していないのは『宋史』の方に遺漏があるのだろうという議論は明らかな失考である。この「張湖南」とは張栻ではなく張孝祥（一一三二—一一六九）を指すのである。乾道三年六月、張孝祥は知潭州となつて長沙に赴き、十月には當地に「敬簡堂」という書堂を建てているが、當時長沙に居合わせた朱子は「敬簡堂分韻得月字」（『朱文公文集』卷五所收）という詩を作り、張栻は「敬簡堂記」（『南軒集』卷四所收）という文を記していることから、朱子一行が南嶽周遊の行に旅立つ前に張孝祥に會っていたことは明らかである。更に張孝祥は前年の七月に南嶽衡山に遊んでおり、その時に「丙戌七月望日自南臺游福嚴書留山中」詩や「上封寺」詩を作っており、予め張孝祥からそのような経緯を聞いてた朱子一行が、實際に衡山山中の各詩に残されていた張孝祥の詩作を読み、感ずる所があつて件の詩をものしたものと推察されるのである。

また、聯句に各作者の姓氏を掲げていないことを譏ってい

中國詩文論叢 第二十四集

るが、これも上述の如く三人の聯句ではなく張栻獨自の作なので失考と言えるが、「敬夫の韻に次す」と題してしながら實は張栻の作であるとするものが何を指すのかは判然としない。篇末の對照表を見れば明らかなように、四庫全書本『南嶽倡酬集』の詩題に「次敬夫韻」を含むものは詩題番號で言え、七・五二の計十題あるが、朱子の作として掲げられるものはいずれも『朱文公文集』にも見えるものである。

ともあれ、多くの問題點の存在から、汪如藻家藏本『南嶽倡酬集』には誤記や疎漏が多く含まれ、南宋當時の原本の姿を留めていないだろうと『四庫全書總目提要』は推斷するのである。

最後に紀昀等の統一見解である所の『四庫全書總目提要』は、附録された林用中關連の資料の存在にも疑問を呈するが、四庫全書本『南嶽倡酬集』巻首所收の書前提要は少々見方を異にする。

……後に朱子の「林用中に與ふるの書」三十二篇・用中の「遺事」十條・及び朱子作る所の「字の序」二首有り、則ち後人用中に因りて採掇附入する者なり。用中は紫陽の高弟爲るも、著作多く湮沒に就く。惟だ

此の本のみ尙ほ其の遺詩を考見す可し。錄して之を存するは、後に傳ふること無きを致さざるに庶（ちか）からんと云ふ。……

つまり、これら林用中關連の資料が附録されているのは、林用中の後裔が汪如藻家藏本『南嶽倡酬集』の成書に大きく關與したことを物語っていると推論するのである。この推論は第一節で紹介した王利民の指摘、即ち四庫全書本を含む三種の版本はいずれも林用中の十一代の子孫である林希仲が刊行した『南嶽倡酬集』を祖本としているという點に合致する。これを承けて次にその林希仲の序文を有する清抄本について考えてみたい。

四 清抄本『南嶽倡酬集』

清嘉慶手抄本『南嶽倡酬集』は『南嶽倡酬錄』と題され、「嘉慶紀元中冬南嶽遊子手錄（八千卷樓珍藏善本）」との注記が爲されている。現在は南京圖書館（虎踞路分館）に所藏され、そのマイクロフィルムのみが閱覽に供されており、その複製は中國國家圖書館（北京、北海分館）にも所藏されている。その體裁は次の通りである。

○「南嶽倡酬集序」（明、余文龍撰）

- 「鵠南嶽唱酬集小引」(明、楊德周撰)
- 「南嶽唱酬集序」(明、鄧淮撰)
- 「南嶽同遊後記」(朱子撰)
- 「南嶽唱酬集序」(張栻撰)
- 「南嶽唱酬集」(本文)
- 「東歸亂藁序」(朱子撰)
- 「林用中字序」(朱子撰)
- 「林允中字序」(朱子撰)
- 「南嶽倡酬集跋」(明、林果撰)
- 「遺事十條」(朱子撰)
- 「附刻晦翁與林東屏先生書及遺事小引」(明、楊德周輯)

この内、朱子撰「南嶽同遊後記」から「林允中字序」に至るまで、及び朱子撰「遺事十條」は、配列や標題に若干の違いはあるものの、四庫全書本と同一の内容であり、唱酬の本文はと言えば、その體裁・配列ともに四庫全書本と全く同じである(若干の文字の異同はあるが)。ここから四庫全書本に収載された汪如藻家藏本はこの清抄本と同祖の版本であったことが窺えよう。また、唱酬の本文の葉の冒頭にはその撰著者として「宋大儒新安朱熹仲晦／廣漢張栻敬夫／古田林用中

『南嶽倡酬集』成書攷(後藤)

擇之同著」と三人の姓名を記し、その横には「古田令四明楊德周孚先訂梓」と記してあることから、この本は楊德周なる者が主體的に刊行したものであることが判明する。この楊德周による刊行の経緯についてはまず、巻首に付せられた余文龍の「南嶽唱酬集序」に記載がある。

東屏林先生「林用中」は、予が郷の先達にして、理學の名儒なり。向に朱晦翁「朱子」の門に従遊し、建安の蔡元定と齊驅並駕す。晦翁至って推して畏友と爲し、甚だ之を敬禮す。通悟修謹、足戸を出でず。偶たま晦翁に偕ひて潭州に走り、守の張敬夫「張栻」を訪ね、因りて南嶽の遊有り。著す所の唱酬詩百四十餘首、會たま中葉散軼して、久しく流傳を失し、遂に「翠屏」・「享帚」の二集と竝んで世に行はるるを獲ず、識者之を銜む「殘念に思った」。即ち文龍燥髮以來「若い頃から」、林先生有るを知るも、杳として『唱酬集』有るを聞かざるなり。崇禎辛未「崇禎四年」、四明广石の楊明府「楊德周」、世胄名公「名門の俊英」にして、祕函宿學、甫めて車を下るや「古田縣に着任するや」即ち石英「蒼英」か?を搜訪し、逸德を表章するに、其の遺藁を西河氏に得たり。殘斷蠹蝕、

中國詩文論叢 第二十四集

重ねて較次を加へ、之を劖劂に付し序を不佞文龍「菲才の私」に徴む。……予曩に衡陽に筮仕する「仕官する」こと凡て七年、登りて南嶽の諸峰を眺むる所の者屢しばなり。椽の如きの筆の、其の奇を探るに堪へたる無きを愧づ。別れ去りて二十載、夢魂尙は衡麓の側に依依たるなり。……广石の刻は、實に先生の功臣なり。九原「あの世の林用中先生」知ること有らば、當に予が言を以て盲瞽者と爲さざるべし。邑人後學 中拙 余文龍 撰す。

これに據れば、崇禎四年（一六三二）、林用中の故郷である古田（福建省古田縣）の縣令に就いた楊德周が、『南嶽倡酬集』の遺稿を當地の西河氏の家で發見した。この遺稿は所々頁が缺けて蟲喰い状態であり、楊德周自身が改めて作品を編次し直し、それを版木に彫って刊行することを企てた。そして二十年前、衡山に近い衡陽に仕官していたことがある古田の名士、余文龍（清、乾隆十九年刊『福州府志』に據れば萬曆二十九年「二六〇二」の進士）に序文の執筆を依頼したということが判明する。余文龍序の次に付せられた楊德周自身の「鐫南嶽唱酬集小引」にも同じくその間の経緯が記されている。

古邑 萬山の深き處に僻在し、名賢 遞ひに衰旺有り。

而うして宋の紹興の間「一二三一」「一二六二」、林東屏「林用中」・草堂「弟の林允中」の兩先生兄弟、崛起して業を紫陽「朱子」の皐比の下に授けられ、蔡季通「蔡元定」と名を齊しくす。道德の淵源、流に沿へば遡る可きのみ。縣北に書院有り、題して「溪山第二」と曰ふ。是れ紫陽の手蹟なり。今其の眞なる者を失すと雖も、筆法尙は道勁にして法に合す。此即ち當時の諸友講學せる處にして、後人地に即きて紫陽を祠り、二林先生焉に配す。周「私、楊德周」幸に茲の土に蒞み、竊かに嘗て山川を憑弔し、蒼舊を寤寐するも、顧るに卒卒として杞宋の餘を以て應ずる者鮮し。邇ごろ肇めて林劍溪先生の、建文の事「靖難の役」に死するを擧げて、諸を學宮に祀る。其の後人因りて示すに『南嶽唱酬集』を以てす。則ち東屏先生紫陽・南軒兩先生に偕ひて、衡嶽を歴覽するに、凡そ于喁の作「唱和の作」尙ほ在り。蓋し劍溪先生は即ち東屏先生の九世の孫にして、道學忠節、後先「子孫も先祖も」輝映す。即ち茲の集も亦た天犀月蟻の一斑なり。……我が國家文を右ひ幽を闡き、凡そ名賢の遺編・忠節の舊蹟は、經天の曜を掲げざること無し。

而うして玉田の俎豆鉅典已に劍溪先生を祀れり。又た再び是の集を鈐^{きぎ}むに、姓氏を綴りて聲施に附するも、夫れ何ぞ敢て妄りに表章に居らん。……夫れ今日の文獻を泯^{ほろ}ぼさざる者は、即ち後日の文獻の必ず泯ぼす可からざる者なり。蓋し周斯土・斯文の爲に昕夕「朝晩」之を望むなり。崇禎壬申「崇禎五年」仲春四明の楊德周孚先敬^{けい}譯^{やく}す。

これは先の序を余文龍に依頼した翌年、崇禎五年（一六三二）春二月、楊德周自身の手で整理した『南嶽倡酬集』を版木に刻む際に書かれたものであるが、古田縣の北にある溪山書院には朱子と共に林用中兄弟が祀られており、近頃林用中の九代子孫に當たる林劍溪を縣學に祀った際に、その子孫に當たるものが『南嶽倡酬集』を楊德周に見せたので、それを版に付して刊行することにしたのだということが書かれている。

溪山書院とは淳化二年（九九一）に古田縣に造られた書院であり、慶元三年（一一九七）、僞學の禁を避けた朱子が古田を訪れ、林用中兄弟等を集めて講學した際にその扁額を揮毫している。後に土地の人が朱子及び林用中兄弟の像を書院の傍に建てて祀るようになったが、嘉靖二十八年（一五四九）、

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

川の氾濫により水没してしまふ。その書院をこの時期縣令となった楊德周が再建するのであるが（清、乾隆十六年刊『古田縣志』卷四による）、彼は併せて、靖難の役（一三九九～一四〇二）で燕兵に降るのを潔しとせずに自害した林用中の子孫、林英（號は「劍溪」、洪武二十七年「一三九四」の進士）を縣學内の鄉賢祠に合祀したのである。恐らくこの時の溪山書院の再建と林英の鄉賢祠合祀が林用中の末裔を大いに感激させ、その家に舊藏されていた『南嶽倡酬集』の遺稿を楊德周の手に委ねる契機となったのであろう（但し余文龍序に謂う所の「西河氏」が林用中の末裔に當たるのか否かは不詳）。

卷末にも同じ楊德周が記した「附刻晦翁與林東屏先生書及遺事小引」が付せられているが、

德周「私、楊德周」既に『南嶽唱酬集』を刻し、已に徐興公從^より諸書を借り、朱子の擇之先生に與ふるの書及び遺事數則を得て、定めて後卷と作す。……或ひと曰く、「前卷 詩を以て行ひ、此學を以て訓^しふ。騷苑儒林固より傳を同じくするか」と。周應^{こた}へて曰く、「西河の業、四詩を以て門を^{もつぱら} 崑にすと稱す。夫れ景物は美なりと雖も、何ぞ性靈に似んや。流連すれば荒^すみ易く、涵泳するに如かず。今諸先生の帙を取りて、

中國詩文論叢 第二十四集

詩を誦し書を読み、尙友して世を論ず。三復之餘、必ずしも岐れて兩載と爲らざらんことを知れり。……崇禎壬申「崇禎五年」暮春、四明の楊德周 敬讓す。

とあるように、この文は専ら『南嶽倡酬集』の後に、朱子が林用中に宛てた學問上の問答に關する書簡や『朱子語類』等に散見する林用中の事績等、林用中關連の資料を他書より拾い集めて付載する理由を述べるものであり、またそこには當然ながら、己が縣令となつた古田の古の名士である林用中を稱揚する意圖も多分に含まれていたことは明らかである。そして『四庫全書總目』が、『南嶽倡酬集』に附録された林用中關連の資料の存在にも疑問を呈するのは、その祖本がこの古田縣令楊德周の手によって訂梓されたことを知らなかつたということをも語るものであり（逆に書前提要の作者は已にそのことを見抜いていた）、當時四庫全書が收載した汪如藻家藏本『南嶽倡酬集』には上掲の余文龍や楊德周の序などが一切付載されていなかったものであつたと想像されよう。

一方、この清抄本には崇禎年間の楊德周等の序とは別に、それより遙か前に書かれた序跋も付載されている。その一つは鄧淮の「南嶽唱酬集序」であり、該序には次の如く記されている。

予韋布「無官」たりし時、『閩通誌』を閱するに、宋の大儒 林擇之「林用中」の『倡酬集』の世に行はるる有り。と。生まるるや晩きを慨き、恆に是の集を見ざるを以て歎ずと爲す。比ごろ出でて襄陽に守たるに、寅友「同僚」林君希仲なる者有り、予が篆を視るの餘を顧みて、是の集を持し出だし、予の一言を毋斬して序を爲るを求む。予喜びて嘆じて曰く、「吾是の集を慕ふこと、蓋し亦た年有り。今焉を見るを得れば、則ち未畢の願、其れ遂に償ふのみ」と。莊誦すること數日、乃ち山川の明秀と夫の臺閣の崢嶸とを知る。其の詳は張南軒「張栻」・朱考亭「朱子」の序に備具すること、固より言を待たざるなり。然れども獨り先生「林用中」隱居して道を學び、仕進を干めず、晦菴「朱子」を師として群彦を友とするを念へば、淵源の懿、自りて來る所有り。今茲の集を見るに、猶ほ三先生を見るがごときなり。惜しいかな 歳を歴ることに既に久しく、而も字畫 蠹の殘壞する所と爲る者尤も多し。賢子孫有りて數世の下に搜求考正して之を表章せざれば、則ち先生平日の心を用ふる所、授受する所、是に因りて遂に泯びざるか。乃ち其の闕を補ひて、

畧はば始めて克よくく成り、編圖して諸を梓しに録きみて、以て其の傳を廣め、上は以て斯文を不墜に續つぎ、下は以て休徳を無窮に承けしむれば、後の是の集を觀る者、以て集むる者を得て、以て其の家世源流の自る所を知るを得るに庶しかしと云ふ。先生諱は用中、字は擇之。東屏は其の別號なり。嘗に天順四年、歳は庚辰秋七月既望に在り。賜進士出身、中順大夫 知湖廣襄陽府事、吉水の鄧淮(11)序す。

これに據れば、天順四年「一四六〇」に知湖廣襄陽府事となった鄧淮が、偶々その時に部下となった林用中の子孫林希仲なる者から蟲喰いの殘本『南嶽倡酬集』を見せられ、新たに編次し直し刊行する予定であるから序文を書いて欲しい旨を要請されたとのことである。そしてその林希仲の跋も同じく清抄本に付載されている。

嗚呼、此 吾が先祖東屏公の遺錄なり。東屏 宋の紹興に生まれ、少き自り警敏なるも、科擧の業を厭ひ、遠く晦菴朱子に従ひて遊び、性理の學を講論す。朱子之を異とし「逸材と見做し」、稱して畏友と爲して、蔡季通「蔡元定」と名を齊しくす。後に晦菴に偕ひて張南軒「張栻」を訪ね、共に南嶽の上に遊び、倡酬し

『南嶽倡酬集』成書致（後藤）

て稿有り、家に藏す。不幸にして屢しばしばは兵燹（兵火）に遭ひ、其の全集を得る者 蓋し寡すくなきなり。乃ち諸を舊譜に簡すれば、中間 尤も殘缺 半を過ぎ、幸に什一を千百に存するのみ。……不肖 乏しきを承け、襄陽衡岳を瞻望すれば、良に用て懷を興す。寧ぞ遺言 泯没して不明・不仁の咎とがを蹈もつむに忍びんや。乃ち公暇に乘じて、哀あはれて之を集め、重ねて校正を加へて、遂に寅長「上役」鄧公の之に序せんことを請ひ、而うして附するに「東歸亂稿」及び序說書跋を以てし、梓に録みて以て傳ふ。……天順四年、歳は庚辰秋七月既望に在り。奉政大夫襄陽府同知、十一代孫 果 希仲 頓首 百拜して書す。(12)

これに據れば、林希仲は天順四年「一四六〇」に襄陽府同知として襄陽（湖北省襄樊市）に在り、先祖の林用中が朱子等と共に遊んだ湖南の衡山からさほど離れていないことから古に思いを馳せ、恐らく當時行李に入れて所持していた所の林用中の遺稿から、南嶽周遊の際にものしたと思われる作品を集めて、改めて『南嶽倡酬集』として刊行することを企て、公務の暇を見ては編集・校正を重ね、完成した稿本を上司の鄧淮に見せてその序文の作成を仰いだとのことである。また

中國詩文論叢 第二十四集

この稿本編集の過程で、朱子の「東歸亂藁序」やその他の序跋も併せて林希仲の手によって付せられたことも判明し、この林希仲再編の稿本が後の『南嶽倡酬集』の原型となったと見て良いであろう。ただ、林家に家藏されていた林用中の遺稿は度々兵火に遭遇したことによってその大半は散佚し、往時に比して十分の一度度しか残っていないかったとのことであり、恐らくその乏しい材料を基に、編集・校正を行なったと見られ、第一節で紹介した現行『南嶽倡酬集』の問題点である、元來あった筈の作品数と現存の作品数が一致しないことや明らかな文字の誤りが多いことなどは、全てこの編集時点での遺稿の不完全さに由來すると思われる。

尚、この林用中の十一代子孫林希仲の「希仲」は字であり、この子孫の姓名は正しくは「林果」と言う。清、乾隆十九年刊『福州府志』卷四十一〈選舉〉に據れば、林果はまさしく前出の九代子孫林英の孫に當たり、同書卷五十一〈人物列傳〉にその略傳がある。

林果 字は希仲、古田の人。天順中 太學由り襄陽府同知に選ばる。時に兵荒し、果 招撫賑恤し、民頼りて以て安んず。……官に卒し、士民 追思愛慕して、爲に祠を立てて以て祀る。

上掲の序文の内容を裏付けるが如く、林果が天順年間に「襄陽府同知」となったことが記載されているが、同時にその林果が不幸にしてこの襄陽府同知在任中に死去してしまったことも判明する。とすれば、林果再編の稿本は刊刻を予定していたものの、恐らく林果の死によってその刊刻が果たされないまま遺族に引き取られ、以後古田林家に家藏されることとなり、それから二百年近く経過した崇禎の時代にその林果再編稿本が楊德周の手に委ねられたものと推察される。それ故、この版本には余文龍・楊德周による崇禎年間の序跋と鄧淮・林果による天順年間の序跋とが併載されることになったのであり、もともと存在した朱・張の序の他に、楊德周の手によって林用中關連の諸資料が補入されることとなった考えるのが妥當と思われる。

そしてこの本を寫したものが清抄本となるのだが、已に考證した如く、明の中期に林果の手によって纏められた稿本が日の目を見ることはなかったからには、その前の時代の「明刻本」とは一體どのようなものであろうか。次に現存する明刻本の體裁を紹介してみたい。

五 明刻本『南嶽倡酬集』

北京圖書館藏明弘治刻本『南嶽倡酬集』は『南嶽唱酬集』と題され、中國國家圖書館（北京、紫竹院分館）にのみ所蔵され、現在マイクロフィルムによってのみ閲覧に供される。「明刻本」という注記のみが爲されているだけであるが、その體裁は次の通りである。

○「南嶽唱酬集序」（張栻撰）

○「南嶽唱酬集」（本文）

○「南嶽遊山後記」（朱子撰）

○「南嶽唱酬集後敘」（明、鄧淮撰）

この體裁は、上述の四庫全書本及び清抄本とは全く趣を異にする。特に唱酬の本文自體が全く異なり、この明刻本ではまず南嶽周遊の過程で朱子がものした作のみを「七日發嶽麓道中尋梅不獲至十日遇雪賦此」（詩題番號〇一）から列記して行き、次は張栻の作のみを同じように列記するが、林用中の作は一首たりとも收載されていない。第一節で紹介した王氏の論攷に言うような、他の二種と同じく林用中の十一代の子孫である林希仲が刊行した『南嶽倡酬集』を祖本としている點など、どこにも見出せない。これは明らかに別種の版本で

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

あり、そのことは卷末に付せされた前出鄧淮の後敘を讀めば明らかである。

朱晦菴・張南軒二先生、其の著書・傳道は皆な天下の後世の尊信する所の者なるも、南嶽の遊は一時の寄興に過ぎざるのみ。初より亦た何ぞ世に關はらんや。然れども南軒の「唱酬の敍」に云ふ、「甲戌自り庚辰に至るまで凡て七日、囊を倒にすれば詩百四十有九篇を得たり」と。晦菴の「遊山後記」に云ふ、「丙辰自り己未に至るまで凡て四日、盡く贈處の諸詩を篇に録す」と。夫れ二先生の遊を以てすら、此くの如く其れ久しきなり。唱酬贈處、此くの如く其れ多かるなり。而れども衡の志未だ載せず、衡の人士未だ聞かず、豈に一の闕典に非ずや。今二先生の詩の文、殆んど南山と雄を爭ひ、山川草木、光影猶ほ存して、吾が衡をして聞こえざるに終ら使む可けんや。余の生まるるや後るるも、幸に二先生の書を読み、又た幸に二先生往遊する所の地に宦遊す。仰止高山、執鞭を爲さんことを願ふも、逸して得可からず。乃者考績にて京に赴くに、舟居事無し。始めて二先生の文集を□（判讀不能）搜するを得て、其の所謂唱酬贈處の諸作を

中國詩文論叢 第二十四集

摘して、^{あは}共せて一帙を成し、以て其の初を忘ること無く、以て衡の故實に備へ、吾が衡の人をして其の詩を誦し其の文を讀みて、二先生を見るが如くせしむれば、亦た千古の一快なり。惟だ同遊の林先生用中の詩は、則ち皆な二籍の載せざる所にして、今考ふ可からざるなり。其の遊ぶ時大雪紛集し、二先生策を決して山に登るに、雪之が爲に霽^はるるが若きは、其の事集中に具載す。余□（判讀不能）堂を嶽廟の前に爲り、妄りに之が記を爲りて、以て來世に詔ぐ。後の遊ぶ者、斯の堂に登るや、斯の集を觀るや、南山殆んど亦た増して高きが若くならん。弘治庚申「十三年、一五〇〇」春三月甲子、賜進士中順大夫、守湘江溫州府、吉水の鄧淮書す。

これに據れば、衡山に赴任していた鄧淮がその任期満了を迎えて、改めて考課の爲に都に戻る舟の中、朱子・張栻の集を繙き、南嶽周遊の時の作と思しき作品をそれぞれの集から摘出し、一冊に纏めて『南嶽倡酬集』に仕立て上げたが、朱・張兩集に收められていない林用中の作品は載せることは出来なかつた旨を記している。即ち、この本は鄧淮が、往時の朱子一行の唱酬の作を、明代に通行していた朱子・張栻の別集

を基にして想像を逞しくしながら再構築したものであり、固より南宋當時の原本ではない。

鄧淮はその傳記資料に乏しく、その出身地の地方志である、清、光緒元年刻『吉水縣志』卷三十四〈宦業〉には、「字は學海、成化十七年「一四八二」の進士。溫州府知府に歴官す」とあり、右の後敘に記された肩書きの溫州府知府となつたことは記すが、それ以外の詳しい官歴は記していない。ただ、この後敘では「幸に二先生往遊する所の地に宦遊す」と云い、また「堂を嶽廟の前に爲り、妄りに之が記を爲りて、以て來世に詔ぐ」と云い、溫州府知府となる前は湖南衡州の地に任官していたことを窺わせる記述がある。實際、清、光緒十一年重修『湖南通志』を検するに、卷九十九〈名宦 八〉の條に、

鄧淮、吉水の人。宏治中、衡州府同知たりて、先哲を表彰し、古人の風有り。溫州の守に擢^めんでらる。¹⁵⁾

とあり、確かに鄧淮が湖南の衡州府同知となつていたことが確認されるし、清、李元度撰『南嶽志』卷二十一〈古蹟〉の條には、南嶽廟の右にある「宋朱張雪霽堂」は明の鄧淮が建てたものであることを記し、併せてその創建の経緯を記した「雪霽堂記略」を載せ、これが後敘中の「堂を嶽廟の前に爲^つ

り、妄りに之が記を爲りて」に合致し、上掲後叙の信憑性を保證するものとなっている。またその在任時期を検討してみると、清、乾隆二十八年刊『衡州府志』卷二十二〈名宦〉の條に、「鄧淮、江西吉水の人、進士。宏治二年衡州同知に任ず」とあり、鄧淮の衡州府同知着任は弘治二年（一四八九）と判明し、また民國十三年刊『續增南嶽志』卷一に載せる鄧淮撰「嶽廟定額碑記」には、

……弘治丁巳春二月、巡撫都憲沈公南嶽に事有り。

廟宇廊房門樓の傾圮し、道士廟戸田土の墮廢せるを慨き、亟かに一新せんと欲するも未だ暇あらず、……公是に於て之を分守少參夏公・分巡僉憲朱公に行はしめ、而うして下りて予に行はしむ。……⁽¹⁶⁾

という文言があり、弘治丁巳（十年、一四九七）にはまだ衡州府同知の任に在ったことが確認される。清、乾隆二十五年刊『溫州府志』に據れば、鄧淮の溫州府知府着任は弘治十二年（一四九九）であり、衡州府同知の任期滿了を迎えて考課の爲に都に戻ったのはこの弘治十二年か或いはその前年と推察されるであろう。そして、この明刻本『南嶽倡酬集』はその時期に鄧淮の手によって再編され、後叙の書かれた弘治庚申〔十三年、一五〇〇〕以降に刊刻されたということになる。

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

しかし、ここで大きな疑問に突き當たる。前節で紹介した如く、この鄧淮は、その約四十年前の天順四年〔一四六〇〕に知湖廣襄陽府事となり、偶々その時に部下となった林用中の子孫の林果が、蟲喰いの殘本ではあるが、林家に所藏されていた林用中の遺稿を基にして『南嶽倡酬集』を再編し、それを鄧淮に見せ序文の作成を依頼した筈である。その過程で鄧淮は、その林果再編『南嶽倡酬集』を「莊誦すること數日」であり、尙且つ「吾是の集を慕ふこと、蓋し亦た年有り。今焉を見るを得れば、則ち未畢の願、其れ遂に償ふのみ」という程その稿本を珍重していたのであれば、その「莊誦する」さなかに、林用中の作も含めて個人的に手抄して手元に殘しておいても良さそうなのである。しかしこの鄧淮の編に成る明刻本には林用中の作は一首たりとも收載されていない。とすれば、恐らく當時の鄧淮は、林果による後日の刊刻を當てにして敢えて個人的に手抄するまでもないと考えていた所、林果の死により『南嶽倡酬集』の刊刻は果たされず、手元に記録もないことから、致し方無く手元にある朱子・張栻の別集から摘録せざるを得なかったとも類推できるかもしれない。しかしそれならば、何故に嘗て林果と邂逅して林用中の作も含まれる貴重な『南嶽倡酬集』を目撃したことを後

中國詩文論叢 第二十四集

叙に記さないのか。また、前節に掲げた鄧淮の「南嶽唱酬集序」の末尾には「天順四年……知湖廣襄陽府事」と署名されていたが、そもそも成化十七年「一四八一」に始めて進士に及第した鄧淮が、どうしてその約二十年前の天順四年「一四六〇」に襄陽府知府という相當に高い役職に就けるのであるうか。天一閣藏明嘉靖刻本『衡州府志』卷六に載せる鄧淮の略傳には「江西吉水の人。進士由り本府同知に陞り、後に温州府知府に陞る」とあり、進士及第後に衡州府の同知に昇格し、次に温州府知府に更に昇格した旨を記すからには、同知昇格の前にそのワンランク上の知府に就いていたというのは平仄が合わないことになる。

こうして鄧淮の閥歴を見て來ると、彼が天順四年に襄陽府知府となっていたということは相當に疑わしいと言わざるを得ないのである。ただ、林果の跋には「遂に寅長鄧公の之に序せんことを請ひ」とあり、上掲の『福州府志』が林果の天順中に於ける襄陽府同知在任を傍證するのならば、やはり林果の跋は信用せねばなるまいから（同時に複数の傍證の存在から明刻本に収める鄧淮の後叙も信用できる）、林果の跋に云う所の「鄧公」とは、鄧淮とは別の「鄧某」を指すことになり、現存の清抄本に収められる該序の署名は後人によって竄入せ

られたものと考え他無い。とすれば、そこに「吉水の鄧淮」の名を補入したのは前出の楊德周ということになるうか。

では、林果が序文の執筆を依頼した「鄧公」とは誰であろうか。清、光緒十一年重修『襄陽府志』卷十九「歷代職官」の條を検するに、天順年間（一四五七—一四六四）の襄陽府知府任官者の名は無く、その前は景泰六年（一四五五）着任の元亮の名が、その後は成化元年（一四六五）着任の于璠の名が記されているだけである。ただ、同じ條の襄陽府同知の項を見てみると、林果の着任時期と思われる天順四年（一四六〇）の箇所には林果の名は無く、代わりに「于某」と記されるのみであることから、この『襄陽府志』の記録自体にも疎漏があると見られ、因って先の襄陽府知府の記録にも餘り信は置けない。一方、『明實錄』の〈憲宗實錄〉卷二十一「成化元年九月の條には、「湖廣襄陽府知府于璠九年の秩滿つ。陞俸一級、再任三年を命ず」とあり、成化元年に於ける于璠の襄陽府知府就任は實は再任であり、その前にも九年間同職に在ったことが判明する。

では、その十年前の景泰六年に着任したのは『襄陽府志』に云う所の「元亮」ではなくこの于璠かというと、そうとも言えないらしい。この當時、襄陽では『襄陽郡志』という地

方志の編纂が進められており、それが天順三年（一四五九）に完成するが、『稀見地方志提要』卷十二上の當該條に據れば、この書は郷人の張恆の撰に係り、湖廣按察司副使の沈慶が校正を行い、襄陽府知府の元亮と襄陽知縣の李儀が刊刻したとのことである（『襄陽郡志』自體は筆者は未見）。『明實錄』の〈英宗實錄〉卷二九九天順三年正月の條には「湖廣按察司僉事 沈慶の復任を命ず」とあり、清、同治十三年刊『襄陽縣志』卷五〈職官〉の條には、天順中に「李人儀」なる者が知縣に就任したことが記録されており、この「李人儀」が『襄陽郡志』に云う所の「李儀」にほぼ相當し（恐らく『稀見地方志提要』か現存の『襄陽郡志』の方に誤りがあるのだろう）、これらの傍證の存在から天順三年に元亮が襄陽府知府の任に在ったことは間違いないと見て良さそうである。ならば翌天順四年の知府は、引き続きこの元亮が擔當したか、或いは何らかの事情により于璠が交代したかのどちらかであろう。件の天順四年の序文には「比ひごろ出でて襄陽に守たるに」という記述があり、どちらかと言えばやはり後から知府となった于璠の方の可能性が高いか。因みに、この二人の傳記資料は更に乏しく、現在の所、元亮は湯陰（河南省湯陰縣）の人で永樂の進士（清、孫奇逢『中州人物考』等による）、于璠は嘉善

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

（浙江省嘉善縣）の人で正統七年（一四四二）の進士（清、光緒十八年刊『嘉善縣志』等による）程度しか調べが付かない。尙、この二人の姓はどちらも「鄧」ではないが、前節の余文龍の序に云う如く、崇禎四年（一六三二）に林用中の故郷である古田で楊德周が手にした『南嶽倡酬集』は已に「殘斷蠹蝕」となっていたのであり、ならば鄧淮撰と改竄された件の序文ももしかしたら所々蟲喰いとなっていて、「鄧公」の「鄧」の部分も判讀不能であつた可能性は否めず、それならば件の序の撰者は右の元亮・于璠のどちらかに擬定することも可能であろう。

ただ、逆にもし「鄧公」の部分に誤りがないとしたら、この「鄧公」とは次の鄧秀を指すのかも知れない。鄧秀の傳記資料も乏しく、安福（江西省安福縣）の人で正統九年（一四四四）の進士（清、同治十一年刊『安福縣志』による）という斷片的な情報が基礎資料となるのみであるが、『明實錄』を繙くに、〈英宗實錄〉卷三三八天順五年（一四六一）五月の條に「南京浙江道監察御史 鄧秀を陞のぼして湖廣按察司僉事と爲し……」とあり、天順四年の翌年で尙且つ襄陽府知府よりワンランク上の「湖廣按察司僉事」という若干の違いはあるものの、確かに當時襄陽府同知となつていた林果の上役に鄧姓の者が就

中國詩文論叢 第二十四集

いた記録があり、林果が序文の執筆を依頼したのは元來この鄧秀であつた可能性も棄て切れないのである。

結語

これまでの考證を改めて纏めてみると、第一節で紹介した如く、現在目睹し得る『南嶽倡酬集』の版本は①四庫全書本、②清抄本、③明刻本の三種であり、この内、①と②は俱に、明の天順年間に、林用中の十一代子孫、林果が再編を試みた稿本『南嶽倡酬集』を祖本としているが、これに對してもう一つの③は、明の弘治年間に鄧淮が、朱子・張栻の別集の中から南嶽周遊の時の作と思しき作品を摘録し、想像を逞しくして『南嶽倡酬集』を再構築したものであつて、前二者とは全く異なる別種の版本である。それ故、①②を林果本、③を鄧淮本と呼び做しても良いであらう。そして南宋期に朱子・張栻・林用中の三人が南嶽を周遊して詩の應酬を繰り廣げた往時の姿をほぼ忠實に保存しているのは、當然林果本となるのだが、その成書の過程で様々な曲折が加わつた爲、より原本に近い林果本でも、詩の本文自體に多くの譌謬を含んでいることを認めねばなるまい。林果本の最大の不幸は、『南嶽倡酬集』を稿本の形で完成させていながら、林果の予期せぬ

死によつて刊刻の企てが頓挫してしまつたことである。その林果の死が何によつてもたらされたかについては不明ではあるが、やはり『明實錄』を繙くに、〈憲宗實錄〉卷十「天順八年（一四六四）十月の條に、「巡撫湖廣左僉都御史王儉、貪暴老疾庸懦の官、襄陽府同知林果等一百二十八員を黜^{しりぞ}けんことを奏す」と、林果が貪官汚吏の一人として告發された記録があり、これが林果の死に繋がつた可能性もある⁽¹⁷⁾。

いづれにせよ、林果本は刊刻が實行されないまま林家に所藏されることとなつたと思われるが、これに對して刻本の形で傳えられる鄧淮本は確かに刊刻が爲された。但しこの刻本には林用中の作は收録し得なかつた。『續增南嶽志』卷二に載せる鄧淮の「憶朱張遊南嶽」詩は恰もその心残りを吐露するかのようである。

南山増重兩高賢[◎]

南山 重きを増す 兩高賢

文在詩亡思惘然[◎]

文 在るも 詩亡びて思 惘然

文字幸從遺集得[◎]

文字 幸に遺集從り得たるも

詩章却恨少人傳[◎]

詩章 却て恨む 人の傳ふるを少く

を

ここで言う「人の傳ふるを少^か」いた「詩章」とは、林用中の作をも含めた三人の唱酬詩全體を指すと思われ、この詩の存

在も鄧淮が林果本を目睹していなかった傍證となり得よう。

実際には林果と鄧淮は邂逅していなかったのに、清抄本（林果本）付載の序の署名に鄧淮の名が書かれているのは、上述の如く後人の、恐らくは明末の楊徳周の恣意的な補填に因るものであろうが、林果の序文に云う「鄧公」を鄧淮と擬定したのは、明代後期には鄧淮本が刻本として通行していて、鄧淮と『南嶽倡酬集』が印象として強く結合してしまったが爲であろう。現在では鄧淮本の傳本は一部を残すのみとなったが、明代に於ける當該本の通行範圍は相當程度のものがあつたと推察せねばなるまい。それでも後に鄧淮本が湮没の方向に向かつていったのは、やはり元來の三人の唱酬の體を爲しておらず、讀者を惹き付ける魅力に缺けていた爲であろう。

一方、林果本は長らく日の目を見ないまま抄本の形で細々と傳えられるのみであつたが、それが四庫全書に收められたのは、元來の三人の唱酬の體を爲し、往時の姿をほぼ忠實に保存した貴重な書物と看做されたからであらう。その點で、林果本は『南嶽倡酬集』及び朱子の作詩活動を考察する上で第一級資料に位置付けられるのである。尙、上述の如く林果本には多くの疎漏・譌謬が含まれ、それを補訂する必要があるが、それはひとまず今後の課題としたい。

中國詩文論叢 第二十四集

【四庫全書本『南嶽倡酬集』全詩對照表】

○本表は四庫全書本『南嶽倡酬集』に收められる朱子・張栻・林用中それぞれの作品の對照表である。

○「詩題」は四庫全書本に記載されるものをそのまま抜き出し、その上に「〇一・〇二・〇三……」の形で詩題番號を付した。

○通覽の便宜を圖る爲、朱子・張栻・林用中の各作品に「01・02・03……」の形で通算の作品番號を付した。

○朱子詩は四部叢刊本『晦庵先生朱文公文集』と比較し、四庫全書本と詩題に異同がある場合はその詩題を、異同が無い場合は「〃」の記號を付した。また、『朱文公文集』に收められていないものには「×」の記號を付し、『朱文公文集』には無く『南軒集』所收の張栻の作であるものには「〔張栻〕」と記し、併せて『南軒集』所收の詩題を記した。尙、郭齊・尹波點校『朱熹集』（四川教育出版社、一九九六）で、朱子の佚文と看做なして同書〈外集〉に補録されているものは『朱熹外集』と記し、併せてその收録箇所を卷數を記した。

○張栻詩は楊世文・王蓉貴點校『張栻全集』（長春出版社、一九九九）所收『南軒集』と比較し、同じく四庫全書本と詩

題に異同がある場合はその詩題を、異同が無い場合は「〃」の記號を付した。また、同書で張栻の佚文と看做して〈補遺〉に補録されているものは『張栻全集』補遺」と記した。

○林用中詩は比較する別集が無いので、作品番號の下には「一」の記號を付した。尙、聯句とされる詩題番號三六・三八・五〇は實は張栻獨自の作品であるが、朱子詩との對照に於いては、比較する別集が朱子にはあるので「×」を付したが、やはり林用中には比較する別集が無いので、空欄のままとした。

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

詩題	詩型	韻目及び韻字	朱子（『朱文公文集』）	張栻（『南軒集』）	林用中
〇一	七絶	下平・侵（林・深・襟）	01 七日發嶽麓道中尋梅不獲至十日遇雪作此	02 遊嶽尋梅不獲和元晦韻	03
〇二	五律	上平・灰（臺・回・梅・杯）	04 十三日晨起霜晴前言果驗再用敬夫定王臺韻賦詩	05 十三日晨起霜晴用定王臺韻賦此	06
〇三	五律	上平・灰（來・臺・開・哀）	07 "	08 用元晦定王臺韻	09
〇四	五律	下平・庚（城・明・盟・生）	10 至上封用擇之韻	11 目方廣過高臺	12（張栻）和擇之看雪
〇五	五律	下平・侵（深・陰・吟・心）	13 "	14・15（張栻）由西嶺行後洞山口路：「西嶺更西路，雲嵐最劬深，水流千澗底，樹合四時陰」以上15的前半，「幽絕無僧住，閑來有客吟，山行三十里，鐘聲忽傳音」以上14の後半」。	
〇六	七絶	上平・元（昏・村・尊）	16 "	17 馬上口占	18
〇七	七絶	下平・陽（茫・蒼・香）	19 "	20 馬上舉韓退之語口占	21
〇八	七絶	下平・青（青・汀・屏）	22 雪消溪漲山色尤可喜口占	23 和朱元晦	24
〇九	七絶	下平・侵（尋・深・心）	25 "	26 登山有作	27
一〇	七絶	下平・蕭（橋・霄・招）	28 "	29 和元晦馬跡橋	30
一一	七絶	下平・先（肩・煙・天）	31 方廣道中半嶺小憩次敬夫韻	32 方廣道中半嶺少憩	33
一二	七絶	上平・真（聲・？・新・人）	34 "	35 道中景物甚勝吟賞不暇因復作此	36
一三	七絶	下平・陽（光・嘗・腸）	37 崖邊積雪取食甚清次敬夫韻	38 崖邊積雪取食甚清賦此	39
一四	七絶	上平・支（垂・寄・詩・時）	40 "	41 和元晦雪壓竹韻	42
一五	七絶	下平・侵（尋・心）	43 "	44 方廣聖燈	45
一六	七絶	下平・侵（陰・尋・心）	46 壁間古畫精絕未開有賞音者	47 和元晦詠畫壁	48
一七	七絶	上平・真（人・身）	49 "	50 和元晦懷定叟戲作	51
一八	七絶	下平・陽（方・湯）	52 羅漢果次敬夫韻	53 "	54
一九	五絶	上平・支（差・詩）	55 "	56 和元晦方廣版屋	57

中國詩文論叢 第二十四集

二〇	泉聲次擇之韻	七絕	下平・侵（吟〔聲〕・音・尋）	58	59	60
二一	霜月次擇之韻	七絕	下平・先（天・煙・娟）	61	62	63
二二	枯木次擇之韻	七絕	下平・麻（牙・花・誇）	64	65	66
二三	夜宿方廣聞長老守榮化去敬夫感而賦詩次韻	七絕	上平・真（眞・新・身）	67	68	69
二四	蓮花峰次敬夫韻	七絕	下平・先（蓮・妍・篇）	70	71	72
二五	殘雪未消次擇之韻	七絕	下平・麻（鴉〔壑〕・霞・花）	73	74	75
二六	行林間幾三十里寒甚道傍有殘火溫酒舉白方覺有暖意次敬夫韻	七絕	上平・灰（堆〔裂〕・回・杯）	76	77	78
二七	福巖寺回望嶽市	七絕	下平・先（煙・天）	79	80	81
二八	福巖寺讀張湖南舊詩	七絕	上平・支（安・詩）	82	83	84
二九	登祝融口占用擇之韻	五律	上平・寒（端・寬・寒）／上平・刪（還）	85	86	87
三〇	晚霞	七絕	上平・冬（峰〔碧〕・上平・東（紅・風）	88	89	90
三一	贈上封諸老	五律	下平・庚（清・聲・情・生）	91	92	93
三二	醉下祝融峰	七絕	上平・東（風）／上平・冬（胸・峰）	94	95	96
三三	林間殘雪時落鏘然有聲賦此	七絕	下平・蕭（搖・遙・霄）	97	98	99
三四	石廡峰次敬夫韻	七絕	下平・先（天・傳・年）	100	101	102
三五	自西園登山宿方廣寺	五律	下平・庚（明・清・生・情）	103	104	105
三六	路出山背仰見上封寺遂登絕頂聯句	五古（二十句）	去聲・真（寺・堅・吹・翠・試・意・類・咄）／去聲・霽（霽・快・憩・騎・抵）／上聲・紙（峙・視）	×	106	107
三七	十五日再登祝融峰用臺字韻	五律	上平・灰（臺・回・梅・杯）	107	108	109

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

五〇	晨鐘動雷池望日聯句	五古 (十四句) 平・東(紅・腫・中・同・風)	×	140 晨鐘動雷池望日	
四九	題福嚴寺	五律 上平・灰(來・栽・開・哀)	137 (張忭) 題福嚴	138 (『張忭全集』補遺)	139
四八	胡丈廣仲與范伯崇自嶽市來同登絕頂舉酒極談得聞比日講論之樂	五律 上平・灰(來・臺・開・哀)	134 "	135 (『張忭全集』補遺)	136
四七	自上封登祝融峰絕頂次敬夫韻	五古 (二十四句) 下平・豪(高・迷・遭・潯・鼈・毫・刀・鑿・勞・毛・滔・擣)	133 "		
四六	自方廣過高臺賦此	五律 下平・庚(城・明・盟・生)	130 自方廣過高臺次敬夫韻	131 (『張忭全集』補遺)	132
四五	夜得岳後庵僧家園新茶甚不多輒分數碗奉伯承	七絕 下平・陽(嘗・香)	127 (張忭) 夜得嶽後庵僧家園新茶甚不多輒分數碗奉伯承	128 (『張忭全集』補遺)	129
四四	宮林閣讀張湖南七月十五夜詩詠嘆久之因次其韻	五古 (十二句) 上平・冬(峰・重・鋪・鍾) / 上平・東(宮・風)	126 "		
四三	自上封下福嚴道傍訪李鄴侯書堂山路榛不可往矣遂賦此	七絕 下平・陽(荒・堂・陽)	123 (張忭) 自上封下福嚴道旁訪李鄴侯書堂山路榛不可往矣	124 (『張忭全集』補遺)。 (『朱熹集』外集) 124	125
四二	過高臺獲信老詩集	七絕 上平・寒(端・闌・寒)	120 (張忭) 過高臺獲信老詩集。(參考) (朱子) 過高臺獲信老詩集夜讀上封方丈次敬夫韻又黯然、借得新詩連夜讀、要從古淡識清妍	121 (『張忭全集』補遺)	122
四一	嶽後步月	七絕 下平・先(邊[月]・娟・眠)	117 (張忭)	118 (『張忭全集』補遺)。 (『朱熹集』外集) 118	119
四〇	渡興樂江望祝融次擇之韻	七絕 下平・麻(遮[棹]・霞・誇)	114 " (『朱熹集』外集)	115 (『張忭全集』補遺)	116 (張忭) 渡興樂江望祝融
三九	方廣寺睡覺次敬夫韻	七絕 下平・庚(情・聲・清)	111 方廣睡覺次敬夫韻	112 (『張忭全集』補遺)	113
三八	中夜祝融觀月聯句	五古 (十句) 下平・先(顛・天・邊・田・翻・然・篇)	×	110 中夜祝融觀月	

中國詩文論叢 第二十四集

五一	題南臺	五律	上平・灰（臺・開・巍・來）	141（張枋）	142（『張枋全集』補遺）。 〔『朱熹集』外集〕	143
五二	同遊嶽麓道遇大雪馬上次敬夫韻	五古 （二十句）	上平・支（差・垂・知・姿・思・奇・隨・詩・時）／上平・微（妃・璣）／上平・齊（低）	144大雪馬上次敬夫韻	145同元晦擇之遊嶽道遇大雪馬上作	146
五三	遊南嶽風雪未已決策登山用敬夫春風樓韻	五古 （十六句）	去聲・翰（觀・漢・畔・斷・嘆・泮・旦・貫）	147風雪未已決策登山用敬夫春風樓韻	148（朱子）奉題張敬夫春風樓。 〔『張枋全集』補遺〕	149（張枋）遊南嶽風雪未已決策登山用春風樓韻
五四	將下山有作	七絶	上平・刪（山・間・還）	150（張枋）下山有作	151（『張枋全集』補遺）。152 〔『朱熹集』外集〕	152
五五	十六日下山各賦一篇以紀時事云	五律	下平・庚（明・情・聲・迎）	153十六日下山各賦一篇仍迭和韻	154和元晦十六日下山之韻	155
五六	又和敬夫韻	七絶	上平・眞（新・眞）	156和敬夫韻	157〔『張枋全集』補遺〕十六日下山各賦一篇以紀時事云之二	158（張枋）和擇之韻
五七	登山回和擇之韻	五律	上平・灰（來・堆・雷・回〔徂〕）	159和擇之韻	160和擇之韻	161

〔注〕

（1）該論に據れば、東景南『朱熹佚文輯考』（江蘇古籍出版社、一九九一）にも詳細な考證があるとのことだが、残念ながら未見である。

（2）全文を以下に記す。「南嶽唱酬訖于庚辰、敬夫既序其所以然者而藏之矣。癸未發勝業、伯崇亦別其羣從昆弟而來。始聞水簾之勝、將往一觀、以雨不果。而趙醇叟、胡廣仲、伯逢、季立、甘可大來餞雲峰寺、酒五行、劇論所疑而別。丙戌至櫺

州、熹與伯崇、擇之取道東歸、而敬夫自此西還長沙矣。自癸未至丙戌凡四日、自嶽宮至櫺州凡百有八十里、其間山川林野、風煙景物、視向來所見、無非詩者、而前日既有約矣。然亦念夫別日之迫、而前日所講蓋有既開其端而未竟者、方且相與思繹討論、以畢其說、則其於詩固有所不暇者焉。丙戌之莫、熹諭於衆曰、詩之作、本非有不善也。而吾人之所以深憊而痛絕之者、懼其流而生患耳、初亦豈有咎於詩哉。然而今遠別之期近在朝夕、非言則無以寫難喻之懷。然則前日一時矯枉過甚之

約、今亦可以罷矣。皆應曰諾。既而敬夫以詩贈、吾三人亦各答賦以見意。熹則又進而言曰、前日之約已過矣、然其戒懼警省之意、則不可忘也。何則、詩本言志、則宜其宣暢潏鬱、優柔平中、而其流乃幾至於喪志、羣居有輔仁之益、則宜其義精理得、動中倫慮、而猶或不免於流。況乎離羣索居之後、事物之變無窮、幾微之間、毫忽之際、其可以營惑耳目、感移心意者、又將何以禦之哉。故前日戒懼警省之意、雖曰小過、然亦所當過也。由是而擴充之、庶幾乎其寡過矣。敬夫曰、子之言善、其遂書之、以詔毋忘。於是盡錄贈處諸詩于篇而記其說如此。自今暇日時出而觀焉、其亦足以當盤盂几杖之戒也夫。丁亥、新安朱熹記」

(3) 全文を以下に記す。「某來往湖湘踰二紀、夢寐衡嶽之勝、亦嘗寄跡其間、獨未得登絕頂爲快也。乾道丁亥秋、新安朱熹元晦來訪予湘水之上、留再閱月、將道南山以歸、迺始偕爲此遊、而三山林用中擇之亦與焉。粵十有一月庚午、自潭城渡湘水。甲戌、過石灘、始望嶽頂。忽雲氣四合、大雪紛集、須臾深尺許。予三人者飯道旁草舍、人酌一巨盃。上馬行三十餘里、投宿草衣巖。一時山川林壑之觀、已覺勝絕。乙亥抵嶽後、丙子小憩、甚雨、暮未已、從者皆有倦色。湘潭彪居正德美來會、亦意予之不能登也。予獨與元晦決策、明當冒風雪亟登。而夜半雨止、起視、明星爛然、比曉、日昇暘谷矣。德美以怯寒辭歸。予三人聯騎渡興樂江、宿霧盡卷、諸峰玉立、心目頓快。

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

遂飯黃心、易竹輿、由馬跡橋登山。始皆荒嶺彌望、已乃入大林壑、崖邊時有積雪、甚快。溪流觸石、曲折有聲琅琅。日暮抵方廣、氣象深竅、八峰環立、所謂蓮花峰也。登閣四望、霜月皎皎。寺皆版屋、問老宿、云用瓦輒爲冰雪凍裂、自此如高臺、上封皆然也。戊寅明發、穿小徑、入高臺寺。門外萬竹森然、間爲風雪所折、特清爽可愛。住山了信有詩聲、云良夜月明、窗牖閒有猿嘯清甚。出寺、即行古木寒藤中。陰崖積雪、厚幾數尺、望石廬如素錦屏、日影下照林間、冰墮鏘然有聲。雲陰驟起、飛霰交集、頃之乃止。出西嶺、過天柱、下福巖、望南臺、歷馬祖庵、由寺背以登。路亦不至甚狹、遇險輒有石磴可步陟。踰二十餘里、過大明寺、有飛雪數點。自東嶺來、望見上封寺、猶紮迂數里許乃至。山高、草木堅瘦、門外寒松皆拳曲擁腫、樛枝下垂、冰雪凝綴、如蒼龍白鳳然。寺宇悉以版障蔽、否則雲氣嘘吸其間、時不辨人物。有穹林閣、侍郎胡公題榜、蓋取韓子雲壁潭潭、穹林攸擢之語。予與二友姑息肩、望祝融絕頂、褰裳徑往。項上有石、可坐數十人。時烟靄未盡澄徹、然羣峰峭立、遠近異態、其外四望渺然、不知所極、如大瀛海環之、真奇觀也。湘水環帶山下、五折乃北去。寺僧指蒼莽中云、洞庭在焉。晚歸閣上、觀晴霞、橫帶千里。夜宿方丈、月照雪屋、寒光射人、泉聲隔窗、冷然通夕、恍不知此身踞千峰之上也。己卯、武夷胡是廣仲、范念德伯崇來會、同遊仙人橋。路竝石、側足以入。前崖挺出、下臨萬仞之壑、凜凜

中國詩文論叢 第二十四集

不敢久駐。再上絕頂、風勁甚、望見遠岫次第呈露、比昨觀殊快。寒威薄人、呼酒、舉數酌、猶不勝、擁氍毹坐乃可支。須臾雲氣出巖腹、騰涌如鎖鑰、過南嶺、爲風所飄、空濛杳靄、頃刻不復見。是夜風大作。庚辰未晚、雪擊窗有聲、驚覺。將下山、僧亦謂石磴冰結、即不可步、遂亟由前嶺以下、路已滑甚、有跌者。下視白雲滄溟瀾漫、吞吐林谷、真有盪胸之勢。欲訪李鄭侯書堂、則林深路絕、不可往矣。行三十里許、抵嶽市、宿勝業寺勁節堂。蓋自甲戌至庚辰凡七日、經行上下數百里、景物之美不可殫敘。閒亦發於吟詠、更迭唱酬、倒囊得百四十有九篇。雖一時之作不能盡工、然亦可以見耳目所歷與夫興寄所託、異日或有攷焉、乃哀而錄之。方己卯之夕、中夜凜然、撥殘火相對、念吾三人是數日間、亦荒於詩矣。大抵事無大小美惡、流而不返、皆足以喪志、於是始定要束、翼日當止。蓋是後事雖有可歌者、亦不復見於詩矣。嗟乎、覽是編者、其亦以吾三人者自儆乎哉。作南嶽唱酬序。廣漢郡張某敬夫云。」

(4) 全文を以下に記す。因みに現行の『朱文公文集』では篇末の日付の記載はどの版本も「冬十月」に作るが、一連の経緯や序中の「首尾二十八日」という記述から推して、「冬十二月」とするのが正しい筈である。「始、予與擇之陪敬夫爲南山之遊、窮幽選勝、相與詠而賦之。四五日間、得凡百四十餘首。既而自咎曰、此亦足以爲荒矣、則又推數引義、更相箴戒者久之。其事見於倡酬前後序篇亦已詳矣。自與敬夫別、遂偕

伯崇、擇之東來。道塗次舍、輿馬杖屨之間、專以講論間辨爲事。蓋已不暇於爲詩。而閒隙之時、感事觸物、又有不能無言者、則亦未免以詩發之。蓋自櫛州歷宜春、汎清江、泊豫章、涉饒信之境、繚繞數千百里、首尾二十八日、然後至於崇安。始盡祛其囊、掇拾亂稿、纔得二百餘篇。取而讀之、雖不能當義理、中音節、然視其閒、則交規自警之詞愈爲多焉。斯亦吾人所欲朝夕見而不忘者、以故不復毀棄、姑序而存之、以見吾黨直諒多聞之益、不以遊談燕樂而廢。至其時或發於一偏、不能一出於正者、亦皆存而不削。庶乎後日觀之、有以惕然自省而思所以改焉。是則此稿之存、亦未可以爲無益而略之也。若夫江山景物之奇、陰晴朝暮之變、幽深傑異、千狀萬態、則雖所謂二百篇猶有所不能形容其髣髴、此固不得而記云。乾道丁亥冬十月二十有一日、新安朱熹序」

(5) 全文を以下に記す。「宋朱子與張栻林用中同遊南嶽倡和之詩也。用中、字擇之、號東屏、古田人。嘗從朱子遊、是集作於乾道二年十一月。前有栻序稱、來往湖湘二紀、夢寐衡岳之勝。丁亥秋、新安朱元晦來訪予湘水之上、偕爲此遊。而朱子詩題中亦稱栻爲張湖南。蓋必栻當時官於衡湘間、故有此稱。而宋史本傳止載栻孝宗時任荊湖北路轉運副使、後知江陵府、安撫本路、不言其曾官湖南。疑史有脫漏也。其遊自甲戌至庚辰凡七日。朱子東歸亂槩序稱、得詩百四十餘首。栻序亦云百四十有九篇。今此本所錄止五十七題。以朱子大全集參校、所

載又止五十題、亦有大全集所有而此本失載者。又每題皆三人同賦、以五十七題計之、亦不當云一百四十九篇。不知何以參錯不合。又卷中聯句、往往失去姓氏標題。其他詩亦多依朱子集中之題。至有題作次敬夫韻、而其詩實爲枋作者。蓋傳寫者譌誤脫佚、非當日原本矣。後有朱子與林用中書三十二篇、用中遺事十條、及朱子所作字序二首、皆非此集所應有。或林氏後人所附益歟。然以南岳標題、而泛及別地之尺牘、以倡酬爲名、而濫載平居之講論、以三人合集、而獨載用中一人之言、行、皆非體例。姑以原本所有存之云耳」

(6) 南嶽周遊的過程で朱子がものした作は『朱文公文集』卷五に纏めて收められており、その最初の詩題（卷五第六首）「七日發嶽麓道中尋梅不獲至十日遇雪作此」の下には「此自り後『南嶽唱酬』に係る（自此後係南嶽唱酬）」という注記が付せられ、そこから數えて五十首後の詩題（讀林擇之二詩有感）の下には「此自り後『東歸亂藁』に係る（自此後係東歸亂藁）」という注記が付せられており、これによって『南嶽倡酬集』の作品の範圍が明らかとなる。その中に「感尙子平事」と題された一首が「方廣睡覺次敬夫韻」と「殘雪未消次擇之韻」との間に置かれていたが、これは四庫全書本『南嶽倡酬集』に收められていないので、『四庫全書提要』に謂う所の『大全集』に有る所にして此の本載するを失する者」とはこの作品を指していると思われる。

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

(7) 書前提要の全文を以下に記す。「臣等謹案、南嶽倡酬集一卷、附錄一卷、宋朱子與張枋林用中同遊南嶽倡和之詩也。用中、字擇之、號東屏、古田人。嘗從朱子遊、是集作於乾道二年十一月。前有枋序、稱來往湖湘二紀、夢寐衡岳之勝。丁亥秋、新安朱元晦來訪予湘水之上、偕爲此遊。而朱子詩題中亦稱枋爲張湖南。蓋必枋當時官於衡湘間、故有此稱。而宋史本傳止載枋孝宗時任荆湖北路轉運副使、後知江陵府、安撫本路、不言其曾官湖南。疑史有脫漏也。其遊自甲戌至庚辰凡七日。朱子東歸亂藁序稱、得詩百四十餘首。枋序亦云百四十有九篇。今此本所錄止五十七題。以朱子大全集參校、所載又止五十題、亦有大全集所有而此本失載者。又每題皆三人同賦、以五十七題計之、亦不當云一百四十九篇。不知何以參錯不合。又卷中聯句、往往失去姓氏標題。其他詩亦多依朱子集中之題。至有題作次敬夫韻、而其中又有敬夫詩者、皆非體例。已出後人重編、非當日原本矣。後有朱子與林用中書三十二篇、用中遺事十條、及朱子所作字序二首、則後人因用中而採掇附入者。用中爲紫陽高弟、著作多就湮沒。惟此本尚可考見其遺詩。錄而存之、庶不致無傳於後云。乾隆四十三年五月恭校上」

(8) 全文を以下に記す。「東屏林先生、予鄉先達、理學名儒也。向從遊於朱晦翁之門、與建安蔡元定齊驅並駕、晦翁至推爲畏友、甚敬禮之、通悟修謹、足不出戶。偶偕晦翁走潭州訪守張敬夫、因有南嶽之遊。所著唱酬詩百四十餘首、會中葉散軼、

中國詩文論叢 第二十四集

久失流傳，遂不獲與翠屏亭二集並行於世，識者銜之。即文龍燦髮以來，知有林先生，查不聞有唱酬集也。崇禎辛未，四明广石楊明府、世胄名公、祕函宿學、甫下車即搜訪石英、表章逸德、得其遺藁於西河氏、殘斷蠹蝕、重加較次、付之剞劂、徵序於不佞文龍。文龍曰：文章顯晦、與仕途通塞互相關者也。先生遁跡鹿門、忘情鼠嚇。身既隱矣。焉用文之。唱酬之作、無非借景寫懷、適鳴天籟、以誌師友一時追隨之盛云爾。然言爲心聲、蘊必有洩、其一種靈睿之氣、陰爲鬼神所呵護。故歷今數百歲、而琰琬猶爛然星芒、膾炙人口也。行篤而文益燦、跡祕而名益彰、先生之謂耶。予曩筮仕衡陽凡七年、所登眺南嶽諸峰者屢矣。愧無如椽之筆、堪探其奇。別去二十載、夢魂尚依依衡麓之側也。今讀先生諸詠、與往時所見一一印符。赫赫山靈且快先生爲知己矣。乃議者以宋不及唐爲病、夫詩本性情、三百皆情也。先生幽貞之趣、直以明新爲標的、則其闡發之詞亦直以達意爲指歸。況唐工風格、宋宗理道、其分途舊矣。又何必生吞李杜、死嚼白劉。軋句敲字、聲牙嚙齒、於清平世界、作魍魎魍魎語哉。广石之刻、實先生之功臣、九原有知、當不以予言爲盲瞽者。邑人後學中拙余文龍撰」

(9) 全文を以下に記す。「古邑僻在萬山深處、名賢遞有衰旺、而宋紹興間、林東屏草堂兩先生兄弟、崛起授業紫陽皐比下、與蔡季通齊名。道德淵源、沿流可溯已。縣北有書院、題曰溪山第一、是紫陽手蹟。今雖失其真者、筆法尙道勁合法。此即

當時諸友講學處、後人即地祠紫陽、二林先生配焉。周幸蒞茲土、竊嘗憑弔山川、寤寐耆舊、顧卒卒鮮以杞宋之餘蘊者。邇肇舉林劍溪先生、死建文事、記諸學宮。其後人因示以南嶽唱酬集、則東屏先生偕紫陽南軒兩先生、歷覽衡嶽、凡于喁之作尙在。蓋劍溪先生即東屏先生九世孫。道學忠節、後先輝映。即茲集亦天犀月蟻之一斑也。竊嘆大賢存神過化之遠、豪傑響答其嘯斯道新火之傳、且其時黨禁方嚴、從遊諸公、始終無易操、而一時杖屨登臨、覺舞雩遊詠之趣儼焉未散。今觀南軒記云、吾三人數日間亦荒于詩矣。事無大小美惡、流而不返、皆足喪志。而朱子云、詩非小善、懼其流而生患。夫詩猶懼其荒也。有如荒甚于詩者、可令諸先生見耶。蓋聖賢永淵治心、了非後人學問能步趨、萬一惟是大道絕續、上爲主盟、次則羽翼、又次則表章。自昔流風遺韻、暫或式微、久必重朗。雖中經兵燹、煨燼烟蔓剝蝕、而陡露迭現、定不終歸湮漫。我國家右文闡幽、凡名賢遺編忠節舊蹟、無不揭經天之曜。而玉田俎豆鉅典已祀劍溪先生。又再鐫是集、綴姓氏附聲施、夫何敢安居表章。倘得聞風景行者、上之羽翼、又上之主盟、諸先生寔式靈之、而篤芳如周、自揣門外漢非敢附弟子之列也。他若子武先生蒙合集、擴之先生草堂集、邵景之先生玉波集、余占之先生克齋集、程寶石先生盤澗集、俱無從覓原本。所望後來同心、搜採幽緒。夫今日之不泯文獻者、即後日文獻之必不可泯者也。蓋周爲斯土斯文所夕望之矣。崇禎壬申仲春四明楊德周孚先敬

課

(10)

全文を以下に記す。「徳周既刻南嶽唱酬集、已從徐興公借諸書、得朱子與擇之先生書及遺事數則、定作後卷、而贅言之曰、夫漢唐以來、集諸儒大成有逾朱夫子哉。末學未闢門牆、輒罵祖呵佛、肆爲無忌無已、則曰、吾爲紫陽功臣也。以名教衡之、此罪人耳。何功臣云。乃當時代興不乏人、大半出於紫陽輩比下、中心誠悅、誰強之而致德鄰、而從游諸賢、羹牆俎豆、風洋洋在千古、士奈何不慎皈依哉。周細繹當時、授受微言、心燈意蘊、語有別會而茗柯勃窣入其玄中。雖不敏如周、恍有觸發。況具利根者、妙契勤行、不晦者文、不朽者心。豈小補耶。或曰、前卷以詩行、此以學訓、騷苑儒林固同傳歟。周應曰、西河之業、以四詩稱崑門、夫景物雖美、何似性靈、流連易荒、不如涵泳。今取諸先生帙、誦詩讀書、尙友論世、三復之餘、知不必岐爲兩截矣。誠正冒子、其爲杓之人者、誠宜束置高閣、而大儒眞儒、超然騰鼎拘墟之外。如諸先生者學術醇、則心術正、而治術必不至殺人、即以當一旦事會、又安知賢者盡力之時、不以奏君子學道之效、此其人不勝僇佻鏹薄者萬倍耶。如曰稱述篇章迂談性命、則世必有能辨之者矣。崇禎壬申暮春、四明楊德周敬讓」

(11)

全文を以下に記す。「予韋布時、閱閩通誌、有宋大儒林擇之倡酬集行于世、慨生也晚、恆以不見是集爲歎。比出守襄陽、有黃友林君希仲者、顧予視篆之餘、持出是集、求予毋靳一言

『南嶽倡酬集』成書攷（後藤）

(12)

爲序。予喜而嘆曰、吾慕是集、蓋亦有年矣。今得見焉、則未畢之願、其遂償耳。莊誦數日、乃知山川之明秀與夫臺閣之崢嶸、其詳備具於張南軒朱考亭之序、固不待言也。然獨念先生隱居學道、不干仕進、師晦菴而友群彥、淵源之懿有所自來。今見茲集、猶見三先生矣。惜乎歷歲既久、而字畫爲蠹所殘壞者尤多。不有賢子孫搜求考正於數世之下而表章之、則先生平日之所用心、所授受、不因是而遂泯乎。乃補其闕、畧始克成、編圖鈐諸梓、以廣其傳、上以續斯文於不墜、下以承休德於無窮。庶後之觀是集者、得以集者、得以知其家世源流之所自云。先生諱用中、字擇之。東屏其別號也。嘗天順四年、歲在庚辰秋七月既望。賜進士出身、中順大夫知湖廣襄陽府事、吉水鄧淮序」

全文を以下に記す。「嗚呼、此吾先祖東屏公之遺錄也。東屏生於宋紹興、自少警敏、厭科舉業、遠從晦菴朱子遊、講論性理之學。朱子異之、稱爲畏友、而與蔡季通齊名。後偕晦菴訪張南軒、同遊南嶽之上、倡酬有稿、藏於家。不幸屢遭兵燹、得其全集者蓋寡矣。乃簡諸舊譜、中閒尤殘缺過半、幸存什一於千百耳。記曰、有善而不知、不明也。知而不傳、不仁也。不自承乏、襄陽瞻望衡岳、良用興懷、寧忍遺言泯沒而蹈不明不仁之咎哉。乃乘公暇、哀而集之、重加校正、遂請寅長鄧公序之、而附以東歸亂稿及序說書跋、鈐梓以傳。僭題數語千末、俾吾後人珍襲而敬承之、所以發潛闡幽、啓其志於無窮也。尙

中國詩文論叢 第二十四集

其懋哉。天順四年、歲在庚辰秋七月既望、奉政大夫襄陽府同知、十一代孫果希仲頓首拜書」

(13) 全文を以下に記す。「林果字希仲、古田人。天順中由太學選襄陽府同知。時兵荒、果招撫賑恤、民賴以安。襄府官校不法、果啓王治之。卒於官、士民追思愛慕、爲立祠以祀焉。」

(14) 全文を以下に記す。「朱晦菴張南軒二先生、其著書傳道皆天下後世之所尊信者。南嶽之遊、不過一時之寄興耳。初亦何關於世哉。然南軒唱酬敘云、自甲戌至庚辰凡七日、倒囊得詩百四十有九篇。晦菴遊山後記云、自丙辰至己未凡四日、盡錄贈處諸詩于篇。夫以二先生之遊、如此其久也、唱酬贈處、如此其多也。而衡之志未載、衡之人士未聞、豈非一闕典哉。今

二先生之詩之文、殆與南山爭雄、山川草木、光影猶存、而可使吾衡終於不聞哉。余生也後、幸讀二先生之書、又幸宦遊二先生所往遊之地。仰止高山、願爲執鞭逸不可得。乃者考績赴京、舟居無事、始得□搜二先生之文集、摘其所謂唱酬贈處諸作、共成一帙、以無忘其初、以備衡之故實、使吾衡人誦其詩、讀其文、如見二先生焉。亦千古之一快也。惟同遊林先生用中之詩、則皆二籍之所不載、今不可考矣。若其遊時大雪紛集、二先生決策登山、雪爲之霽、其事具載集中。余□爲堂於嶽廟之前、妄爲之記、以詔來世。後之遊者、登斯堂也、觀斯集也、南山殆亦若增而高也。弘治庚申春三月甲子、賜進士中順大夫、守湘江溫州府、吉水鄧淮書」

(15) 「鄧淮、吉水人。宏治中、衡州府同知、表彰先哲、有古人風。擢溫州守」

(16) 「……弘治丁巳春二月、巡撫都憲沈公有事南嶽、慨廟宇廊房門樓之傾圯、道士廟戶田土之墮廢、亟欲一新而未暇、……公於是行之分守少參夏公・分巡僉憲朱公、而下行於予。……」

(17) 但し、この告發を行った王儉は、同じ年の七月には當時の荊州府知府等八十二人を、八月には黃州知府等百十三人を同様に貪官汚吏として告發しており、このような亂奏ぶりから見て、林果が眞に貪官汚吏であつたかどうかについては即斷できない面もある。

〔附記〕 本稿は、獨立行政法人日本學術振興會平成十七年度科學研究費補助金による研究（基盤研究C…課題番號16520216）の研究成果の一部である。また、中國國家圖書館藏の清抄本・明刻本の補充調査に關しては、現在北京大學留學中の早稻田大學大學院博士後期課程（東洋哲學專攻）の松野氏に盡力頂いた。併せて厚く感謝の言葉を述べたい。